



断片的なものの感情の記憶

今回のマガジンは何を書こうかな、と呟いたところ「またエッセイっぽいのはどう？」と言われて考えてみた。確かに最近言い切ること疲れしてきたような気がする。自分の中を消化されずにモヤモヤと漂っていて、妙に何度も思い出される出来事だけれど、事例報告書に乗ることも、分析や考察に使われることもない、ただの記憶。そんなものを書き綴ってみたいとなった。

どんな風にかこうかと考えて読み返した本がある。岸政彦先生の「断片的なものの社会学」という本だ。学生の頃に、ふらっと立ち寄った本屋さんで目に留まり、ジャケ買いしたのだが、読んでみてめちゃくちゃ面白かった本である。社会学者としてインタビューを行い、語りを分析することを仕事としている著者が、分析も解釈もできなかったが心に残っているエピソードを書き綴っている。

『この世界のいたるところに転がっている無意味な断片について、あるいは、そうした無意味な断片が集まってこの世界が出来上がっていることについて、思いつくままに書いてみよう。(2015 岸)』という実験的で挑戦的なこの本は、「物事や他者を分析して解釈し、理解しなければ！」と躍起になっている頭を冷やすような良い処方箋のような1冊だった。9年ぶりに読み返してみてもやっぱり面白かった。



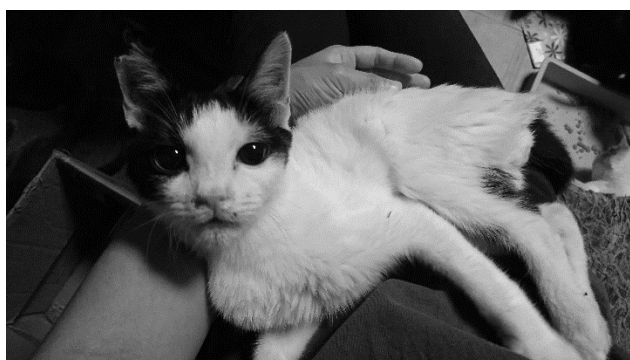
私の中にも、漂ったまま消えていかない「無意味さ」を含んだ記憶の断片がある。それを今回は書いてみたいと思う。

はじまりのエピソード

多頭飼育崩壊のお家に初めて関わった時のことだった。猫が増えてしまったはじまりのエピソードを聞いたところ、「夫が交通事故で亡くなって、その車からこの子が出てきたんです（ロシアンブルーのシニア猫を撫でながら）。夫の形見と思って大切にしているんです。その後、たまたま保護して、飼い始めた猫との間に子猫が沢山生まれてしまっで・・・。」と涙ながらに語ってくれた。そんなドラマみたいな事も起きるのか、それは思い入れが強くなるなど純粋に心動かされて聞いていた。その後、全頭の不妊手術など色々終わり、数ヶ月経ってからこれまでを振り返りをご家族と話をしていた。はじまりのエピソードを改めて聞くと、「お兄ちゃんが猫飼い始めて、心の安定に良いつて聞いて、夫が亡くなってから私も不安定やったから、それで猫を飼おうと思ったんですよ。」とさらりと言われた。全然話が違うじゃないか。

今でこそ関わった多頭飼育崩壊の家庭が20件以上になり、飼い主さんが語る過去のエピソードは、聞くタイミングによってだいぶ変わることがよくある、という事を知ったので、多少のストーリーチェンジでは動じなくなった。飼い主さんが語る物語との距離感が掴めてきたというべきか。

私たちは誰でも、過去の出来事を語る時、今の時点で振り返ってみて、その出来事を意味づけて、解釈して話している。今の状況が変われば、過去の出来事の意味づけや解釈が変わることは当然とも言える。だいぶファンタジーだった始まりの1匹のエピソードが、色々落ち着いた頃に現実味のあるエピソードに変化していたのは、良い事なのかもしれない。



無意味な会話

猫を26匹にまで増やしてしまった高齢女性のお家の支援に入っていた。子猫は引き取って保護し、成猫は全頭不妊手術を支援して、現在お家の中には17匹だ。飼い主さんがお住まいの県は10匹以上の多頭飼育者は行政に多頭飼育届けというものを提出しなければいけない。届け出を出すと保健所の職員さんが家庭訪問に来るのだが、飼い主さんが訪問

をひどく嫌がっていた。「形式的なものだから、さらっと対応していただければ大丈夫だと思いますよ」と説明し、私も立ち会うことで渋々同意してくれた。

訪問当日、職員さんが2名こられて、まずは申請されている頭数が本当に飼われているのか個体確認をするという。飼い主さんが淡々と、なぜかちょっと怒ったような口調で、指差ししながら、「あれが、アマリ、こっちはコナン、今逃げたのがルパン」と言いながら説明していく。猫たちは知らない人に驚いて逃げまどい、いくつかの部屋を行ったり来たりする。「うん、うん」と相槌を打ちながら何か書き留めていく職員さん。押し入れを開けて「ここに隠れてるのが、シャーロックで、あれがダイキチ」と確認作業は続いていく。「うん、うん」と相槌を打ちながら何か書き留め続けていく職員さん。今、ダイキチと言われていた子はさっきルパンだと言われて、逃げ走って押し入れに逃げ込んだ子ではないだろうか。猫は17匹中15匹キジトラ模様だ。みんなそっくりなのだ。などと考えながら見守っていたら確認作業は無事全頭終わったらしい。ほんまかいな（エセ関西弁がでるほどツッコみたくなった）。

次に、職員さんは「この子たち、飼い主さんに何かあったら、引き継いで面倒見てくれる人いるの?」と聞く。「いないですね。」と飼い主さん。「もしもの為に、見つけといてもらえますか」と職員さん。「はい。分かりました。探しておきます」と飼い主さん。その回答を聞き、職員さんはうんうん、と言いながら何かをまたボードに書き留める。

横で見ていると、こんなに無意味な会話が世界にあったのか、と驚いた。80歳近い飼い主さんは相談できる人が誰もいなくて多頭飼育崩壊に陥ってしまったのだ。友達が沢山いる人だって17匹の飼い猫を引き取ってくれる人を探すなんて至難の業だ。できるわけがない。1mmの期待もしていない指導、1mmのやる気もない回答。会話としては成り立っているし、文字だけを見れば意味も通っている。でも、2人の間には何も通っていない、形式だけの会話。家庭訪問は10分ほどで終わった。なぜか皆、満足そうだった。私だけ空っぽだった。



日本を、前へ。

ある市営住宅に住む家族の元に訪問した。このお家では猫が70匹以上に増え、体調が悪くて働けないお父さん、精神的な病気を抱えるお母さん、引きこもり歴10年以上の子ども、おばあちゃんへの高齢者虐待と、沢山の課題を抱えている。そんなご家族との付き合いも7年になり、全頭の手術を定期的な見守りを経て、猫は13匹にまで減っている。とうとう子どもは自立して家を出る準備を進めている。そんな時に、年金や生活保護費など公的支援が減ってしまうことが分かった。このまま猫を飼い続けられるのか、そんな深刻なテーマが家族会議の議題にあがっているらしい。猫の今後に関わる重要な会議なので、私にも参加要請があった。会議の日、お家の窓には通行人に見えるように選挙ポスターが張られていた。推し党があるんだ、と思いながらお家に入り、コタツを囲んで話し合いが始まった。各自のお金の事情を共有しあい、家族それぞれの今後の生活や猫に対する想いを話しあう。これから独立しようとしている子どもが「本当に全頭飼い続けられるのか。飼える頭数に減らすこともやむなしではないのか。」と厳しい意見を投げかける。それに対し、ただ、「飼いたい、ここまで面倒見てきたんだし」という親世代。はじめは、一人暮らしをする子どもが、自分に支給される生活保護費や障害者年金から猫のお世話代にお金を捻出したくないんじゃないかと思っていた。でも話をきいていたら、そんな浅い話ではなかった。お家の猫たちは。おしっこが詰まりやすい子が多く、療法食を買っているために、フード代と猫砂代などで月4万円ほどの支出になっていた。療法食を諦めて低価格のフードに変えれば月1万5千円で済む。だが、そうすると恐らくおしっこが詰まって苦しむ子が出てくる。

ずっと猫たちのお世話や通院をやってきていたのは自分（子ども）で、病気で苦しむ子を見ることは本当に辛いこと。自分が一人暮らしになれば、今まで可愛がってきただけの親世代が看病やお世話をすることになる。それが本当にできるのか？という現実を見た子から親への問題提起だった。

愛護センターに引き取ってもらって殺処分になって死ぬ。家で体調が悪くなり、病院へ連れて行くお金が無いから治療を受けられず苦しんで死ぬ。どっちに転んでも死ぬ。自分たちが飼い主だったばかりに……。話のトーンは下がっていく。でも、同じ死ぬでも、愛護センターで知らない人に囲まれて怖い想いをして苦しんで死ぬよりも、家で苦しんで死ぬ方が、まだ恐怖が無いだけましかな。見るの辛いだろうけどなあ。耐えられるのかは分からない。フードの質を下げたすぐに懸念するような事態にあるのかも分からない。

でも、とりあえず、3人で5千円ずつ出し合って全頭を飼い続ける方向で2ヵ月間頑張ってみようよ。それで2ヵ月後にもういちど家族会議をしようということになった。「じゃあ、また2ヵ月後に。」そうやって家を後にして、団地の階段を下りてお家を振り返る。「日本を、前へ。」お家の窓には青く眩しいポスターが貼られている。

今月も全員で生き延びられるだろうか。そんな不安を抱えたお家の窓で「日本を、前

へ。」と道行く人へ語りかけるポスターが目に焼き付いて離れない。



■ えぐいビワと壁の穴

黒猫ばかりをお家で可愛がっているおばあちゃんのお家に訪問した。みんな真っ黒で、壁に空いている小さな穴から出入りしている。みんな真っ黒なので、実際に何匹がおばあちゃんの家に入ってご飯を食べているのか誰にも分からない。ケアマネージャーさんは穴を閉じた方がいいんじゃないかと言った。でも、穴を閉じてしまったら、閉じた時に外に居た子は二度とお家へは入れなくなってしまうし、お家の中の子は、外界との穴が閉じられた時点でおばあちゃんの“飼い猫”になってしまう。この黒猫たちは、夜になると穴から入ってきておばあちゃんの家に入ってぬくぬくと寝て、朝になると穴から出勤していき、上の階のおじいさんの宅の玄関先で朝ごはんをもらって、30m先の空き家で遊んだり、子育てをしたりして、60m先のスナックにも出入りしてご飯をもらっている。私が把握しているだけでも、3カ所は餌場があるのだ。おばあちゃんは認知症がはじまっている。シェア猫のままの方が彼ら（猫）には良い。

おばあちゃんの家を訪問すると紅茶かコーヒーを出してくれるのだが、ある日、出てきたコーヒーにはなぜかクルトンとパセリが浮いていた。味はコーヒーなのだが、見た目がおかしい。飲みかけのコーンポタージュの上にコーヒーを入れたのか？そんな事するかな？と思いながら半分くらい飲んだところで、おばあちゃんが「お代わりし」と紅茶を注いでくれた。コーヒーとクルトンと紅茶が混ざったその飲み物は、ちょっと切ない味がした。

でも、美味しくはないけど飲めないほどではないな、まだ大丈夫。そう考えていたら「これ、近所でビワ取ってきて甘く煮たんやけど。」と焦げ茶色の塊が小皿に乗せられて出てきた。今、冬ですけど。恐る恐る口にすると舌いっぱい広がるえぐ味。これは、ダ

メだ。

帰り道、おばあちゃんちの穴を道路から眺めながらケアマネージャーさんに「認知症が酷くなってる気がするんです」と電話をした。おばあちゃんがここで猫と暮らせる時間はあとどれくらいあるだろうか。



認知症のおばあちゃんの一人暮らしは、どこまでがセーフラインで、どうなったらアウトラインなのか、自分では判断ができなかった。でも、えぐいビワを食べた時、こればヤバいところまできはじめてしまったんじゃないかと急にさみしくて悲しくなったのを覚えている。笑いの小ネタにできないレベルになったというか。ケアマネージャーさんがとても親身に対応してくれたので、その後も任せられてよかったが、ずっとビワの味が忘れられない。そもそもビワだったのかも不明なのだが。

おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com